

令和4年(第16回)みどりの学術賞選考委員会  
委員長コメント

令和4年(第16回)みどりの学術賞受賞者の選考にあたり、選考委員会は、みどりに関する学術研究に造詣の深い全国の学識経験者約450名の方々に対し、受賞に相応しい候補者の推薦を依頼いたしました。

その結果、候補者として、大変幅広い研究分野から75名の受賞に相応しい研究者を推薦していただきました。

選考委員会は、推薦のあった方々の業績を慎重に調査・審議し、分子遺伝学分野と植物生態学分野で活躍されているお二人の方が受賞に相応しいとの結論にいたしました。

受賞者のお一方は、龍谷大学 Ryukoku Extension Center 顧問の岡田清隆博士です。我が国で最初にシロイヌナズナをモデル植物として研究に取り入れ、植物の様々な生理機構を解明する分子遺伝学の研究手法を確立されました。その成果はイネやトマトなど多様な農作物における形態形成機構の解明や生産性向上に関する研究の確立にも寄与し、農業問題や環境問題の解決につながる植物科学の発展に大きく貢献されました。

もうお一方は、京都大学大学院農学研究科教授の北島薫博士です。様々な樹種の共存に係る仮説を熱帯林で実証し、森林の更新過程の機能生態学分野において顕著な研究成果をあげられました。また、森林上部の葉の光合成や呼吸量等を世界に先駆けて測定し、熱帯林生態系の炭素収支モデルの精度向上に寄与されるなど、植物生態学の立場から地球環境にとって重要な熱帯林の保全に大きく貢献されました。

受賞者のお二人は、いずれも学術的な観点から極めて優れた業績を修められただけでなく、人類とみどりとの関わりについて深く追求され、みどりを活かして暮らしていく未来を示されました。

選考委員会を代表し、両博士の永年に渡るご研鑽に対し、心から敬意を表するとともに、みどりに関する学術が新たな知をもたらし、社会を動かす源泉になることを期待いたします。

令和4年3月7日

みどりの学術賞選考委員会委員長  
篠崎 和子